金沢龍谷高等学校 中等部
中等部通信
junior high school communication
vol. 22
令和４年９月29日（木）

学びの個別最適化 ⑥

知識基盤社会の到来、そして知識基盤社会が求める学力論なり教育観は、産業革命がかけた200年に及ぶ呪縛から私たちの学校が抜け出し、本来の子育ての場へと生まれ変わる、またとないチャンスであると考えるべきです。

左の奈須正裕教授が書かれた本に、私は２０１８年に出会い、上にある文を目にして、心の底から感銘を受けました。

産業革命がかけた200年に及ぶ呪縛

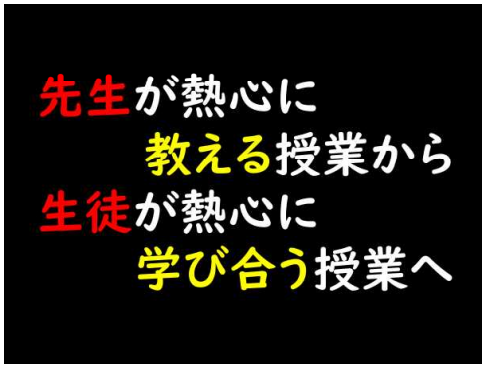
このことを伝えたくて、中等部通信第２０号そして第２１号の２つにわたって、「２０世紀の学習者に求められたもの」を紹介しました。

太田美由紀さんのコラムから抜き出した文章はどうでしたか。

さらに言うならば、３連休前の脇道だった第１８号の「学校システムを訴える」の趣旨も同じだったとおわかりになったと思います。

ならば、現在の学校教育の在り方では、根本的に『個別最適な学び』をすることそのものに、無理があるのではないか。

そうなんです。
無理があるんです。
だから、学校は変わらなければならないのです。



西南部中の私は、その糸口を「できる限り、教えない授業」に求めていくことにしたことは、すでにお話しました。

学校は変わらなければならないのです！
だめなところは直して、よいところはさらに深化発展させるのです。
奈須正裕教授 の文章から抜粋します。

子どもが本来的に有する学びや育ちのメカニズム、さらに、それをこそ拠り所に子どもたちを教え、育んでいこうとすると、おのずと資質能力やそれを基盤とした教育へとたどり着きます。

主体的・対話的で深い学びとは、ごく普通に子どもがその誕生の時から進んで旺盛に展開してきた学びの延長線上でこそ実現可能であり、また実現すべきものなのです。すでに子どもたちが展開している学びをそのまま就学後も連続させ、さらに、各教科等の特質に応じた見方・考え方に繰り返し触れさせることで、学びの方略や形成する概念を徐々に各教科等の特質に応じて洗練・統合させていけるよう、意図的・計画的・組織的に支援するのが教師の仕事であり、学校の任務なのです。

本来の子育ての場へと生まれ変わる　その糸口が、ここにあると私は思います。